

## 麻しん(はしか)

**Q：麻しん(はしか)が流行していると聞きましたが？**

**A：**世界規模で流行しています。日本は2015年に麻しん排除国と認定されましたが、最近海外からの帰国者、入国者による「輸入はしか」が発生してきました。

世界規模で麻しんが流行しています。特に、ウクライナ、フィリピンで急増しています。フィリピンでは2019年に入り1万2千人以上が感染し、200名以上の死者が出ています。

日本でも大阪府で1週間に新たに確認された麻しん患者は35人と急増し、今年(2019年)の累計患者数は81人になりました。

日本は2015年には世界保健機関(WHO)から麻しんの排除国と認定されました。その後も海外からの帰国者、入国者が感染源となる「輸入はしか」が単発的に発症してきました。

### 麻しん(はしか)

麻しんは、麻しんウイルスによって引き起こされる急性の全身感染症として知られています。

麻しんウイルスの感染経路は、空気感染、飛沫感染、接触感染で、ヒトからヒトへ感染が伝播し、その感染力は非常に強いと言われています。免疫を持っていない人が感染するとほぼ100%発症し、一度感染して発症すると一生免疫が持続すると言われています。

### 症 状

感染すると約10日後に発熱や咳、鼻水といった風邪のような症状が現れます。2～3日熱が続いた後、39℃以上の高熱と発疹が出現します。肺炎、中耳炎を合併しやすく、患者1,000人に1人の割合で脳炎が発症すると言われています。死亡する割合も、先進国であっても1,000人に1人と言われています。

その他の合併症として、10万人に1人程度と頻度は高くないものの、麻しんウイルスに感染後、特に学童期に亜急性硬化性全脳炎(SSPE)と呼ばれる中枢神経疾患を発症することもあります。

### ワクチン

麻しんは感染力が強く、空気感染もするので、手洗い、マスクのみで予防はできません。麻しんの予防接種が最も有効な予防法といえます。

また、麻しん患者さんに接触した場合、72時間以内に麻しんワクチンの接種をすることで、麻しんの発症を予防できる可能性があります。接触後5、6日以内であれば、 $\gamma$ -グロブリンの注射で発症を抑えることができる可能性がありますが、安易にとれる方法ではありません。詳しくは、かかりつけの医師にご相談ください。また、定期接種の対象者だけではなく、医療・教育関係者や海外渡航を計画している成人も、麻しんの罹患歴がなく、2回の予防接種歴が明らかでない場合は予防接種を検討してください。

麻しん含有ワクチン(主に接種されているのは、麻しん風しん混合ワクチン)を接種することによって、95%程度の人が麻しんウイルスに対する免疫を獲得することができると言われています。

す。また、2回の接種を受けることで1回の接種では免疫が付かなかった方の多くに免疫をつけることができます。2006年度から1歳児と小学校入学前1年間の小児の2回接種制度が始まり、2008年度から2012年度の5年間に限り、中学1年生と高校3年生相当年齢の人に2回目のワクチンが定期接種として導入されていました。

ワクチン接種後の反応として多く見られる症状として発熱、発疹、鼻汁、咳嗽、注射部位紅斑・腫脹などがみられます。重大な副反応として、アナフィラキシー、急性散在性脳脊髄炎(ADEM)、脳炎・脳症、けいれん、血小板減少性紫斑病がごく稀に(0.1%未満)報告されていますが、ワクチンとの因果関係が明らかでない場合も含まれています。

なお、麻しん含有ワクチンは、ニワトリの胚細胞を用いて製造されており、卵そのものを使っていないため卵アレルギーによるアレルギー反応の心配はほとんどないとされています。しかし、重度のアレルギー(アナフィラキシー反応の既往のある人など)のある方は、ワクチンに含まれるその他の成分によるアレルギー反応が生ずる可能性もあるので、接種時にかかりつけの医師に相談してください。

#### 妊娠している場合

妊娠中に麻しんに罹ると流産や早産を起こす可能性があります。妊娠前であれば未接種・未罹患の場合、ワクチン接種を受けることを積極的に検討すべきですが、既に妊娠しているのであればワクチン接種を受けることが出来ませんので、麻しん流行時には外出を避け、人込みに近づかないようにするなどの注意が必要です。また、麻しん流行時に、同居者が麻しんに罹る可能性の高い方(例えば麻しんの感染歴がなく、麻しんワクチンの2回接種が明らかでない者で、麻しんウイルスに曝露される可能性が高い者など)がおられる場合はワクチン接種等の対応について、かかりつけの医師にご相談ください。

#### 海外渡航に際しての注意

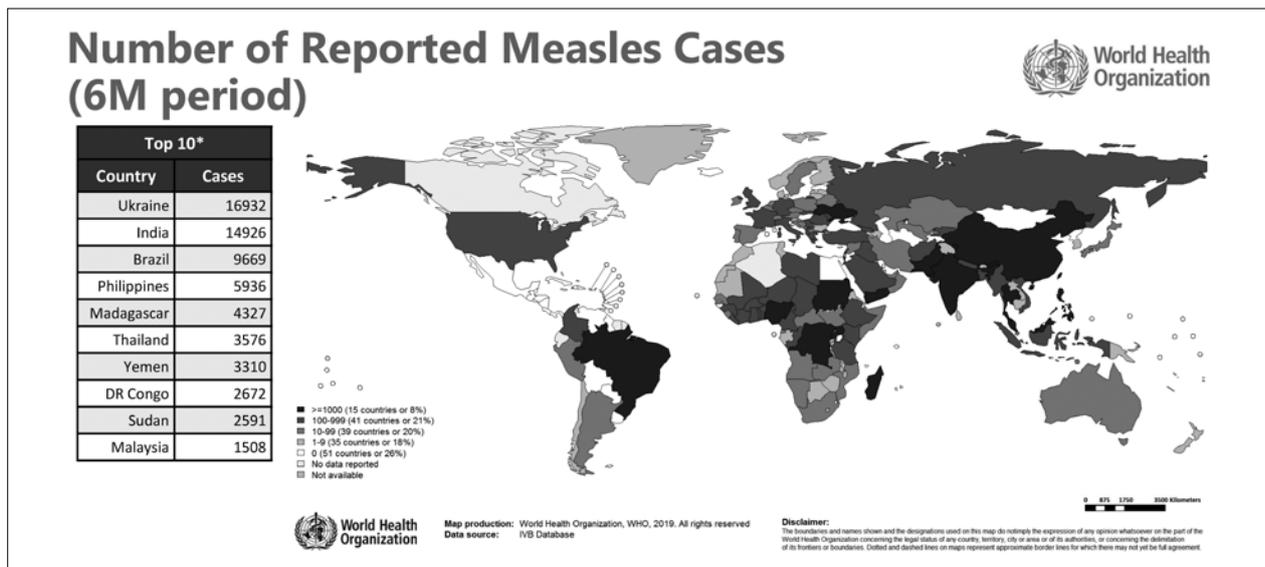
多くの南北アメリカ(輸入例とその関連)、中東、ヨーロッパ諸国は、年間数例から2桁までの非常に少ない報告数にとどまっています。

その一方で依然として多数の患者の報告があるのは、主にアジア及びアフリカ諸国です。中でも、地図中に黒色で示めされたウクライナ、インド、ブラジル、フィリピン、マダガスカルなどからの報告数が特に多いです。

日本を含めたほとんどの先進国では、麻しん対策として麻しんを含むワクチン(主にMMR[麻しん・ムンプス・風しん]ワクチン)の2回接種法がとられています。こうした対策の結果、世界各国では麻しん排除を達成する国が増加しています。

2016年9月27日、WHOは、南北アメリカ大陸を含むアメリカ地域が麻しんの排除状態であると宣言しました。

しかし、下図のように麻しんが多く発生している地域が、いまだに多くあることから、麻しんに罹った(検査で診断された)ことがない方が海外渡航される時には、あらかじめ麻しんの予防接種歴を確認し、麻しんの予防接種を2回受けていない場合、又は接種既往が不明の場合には予防接種を受けることを検討してください。



文献1)より引用

### 学校保健安全法における取り扱い

麻疹は第2種の学校感染症に定められており、解熱した後3日を経過するまで出席停止とされています。ただし、病状により学校医その他の医師において感染の恐れがないと認めたときは、この限りではありません。また、以下の場合も出席停止期間となります。

- ・患者のある家に居住する者又はかかっている疑いがある者、かかるおそれがある者については、予防処置の施行その他の事情により学校医その他の医師において感染のおそれがないと認めるまで。
- ・発生した地域から通学する者については、その発生状況により必要と認めるとき、学校医の意見を聞いて適当と認める期間。
- ・流行地を旅行した者については、その状況により必要と認めるとき、学校医の意見を聞いて適当と認める期間。

### 【 参考文献 】

- 1) 厚労省 HP：麻疹について  
[https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/measles/index.html](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/measles/index.html)
- 2) 国立感染症研究所 HP：麻疹とは  
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/518-measles.html>